

「研修会等名称」

アルク主催 大学のグローバル化 情報交換セミナー vol. 22

「学びの在り方」について考える

場所：アーバンネット神田カンファレンス

期間：9月28日(土) 13:00-16:30

1. 研修の内容

研修のテーマは「学びの在り方について考える」というもので、4人の講演者、3大学の「学びの在り方」が共有された。一つ目の講演は北海道大学におけるFD、SDの取り組みについて、大学に設置された高等教育研修センターでFDを専門として担当する専任教員である山本堅一先生が説明された。北海道大学は研究大学ではあるものの、教員の教育の質を向上させるために、北海道における「高等教育支援」を先導する存在として、FDに熱心に取り組んでいる。具体的には年間約50回にわたる教職員研修を行っており、その参加者の半分以上は北海道大学の教員である。講演では、多忙な教員には「参加を強制せず、できるだけ多くの種類のFDの(興味のわく)参加機会を提供する」ことが良いと示された。例えば、英語による研究発表の仕方や、プレゼンテーションの仕方など、教員自身が学生に伝授する必要があるのに、教員の個人的経験に頼ってしまい、一般的に効果的であるとするコツやプレゼンテーションの組み立て方をそもそもどう教えるのか等、教授方法を知らない場合に、必要となる方法論のレクチャーなどである。「参加してほしい教員にそもそも参加してもらえない場合はどうすればよいか」に関しては、極論ではあるが「参加しなくても良い。研究専門の教員と教育と研究両方を担う教員とで給料に差をつけてもいいのではないか」という意見が示された。2つめの講演は、SGUに採択された創価大学におけるグローバル化の取り組みとしてのワールドランゲージセンターでの活動の紹介と、TOEICの授業におけるeラーニングシステムの採用例についてであった。ワールドランゲージセンターでは、留学生支援の取り組みとして、有償で留学生を雇い、利用者の学生の英会話の練習の機会や、英語でのエッセイライティング指導、スピーキングの個別指導なども行っているようである。本学のラーニングcommonsとグローバルラウンジをドッキングさせて、より大規模なものにしたような場所であるとの印象を受けた。毎日2000人が利用するようである。利用頻度に応じたリワードシステムも採用しており、学生への徹底的な利用促進の努力が見られた。授業におけるeラーニングの採用例に関しては、少人数クラス(11人クラスなど)内でのeラーニングの進捗度合のシェアとピアレビュー、教員による月一回の進捗チェックの実践例と、学生のアンケート結果が示された。3つ目の講演は東洋学園大の英語コミュニケーション学科における、eラーニングの授業への組み込み例が説明された。下山先生のいう、ブレンデッドラーニングである。授業にeラーニングを組み込む際に課題となるのは、一に学生のモチベーションの維持である。そのためには、節目で学生の進捗度合いをチェックしたり、学生の「つまづき」をできるだけ早めに把握しフィードバックをしたりすることが必要であることが示された。一番重要なのは、授業の10~15分を使って、学生にeラーニングに集中的に取り組んでもらうことと、小テストにより理解度を常にチェックすることである。質問では、非常勤教員や専任教員でe-learningに疎い教員が学生に使い方を説明するにはどうしたらいいのか等が聞かれた。東洋学園大では、専任教員の持ちコマ数制限のため、必ずしもe-learningを組み込んだ授業を専任教員が担当しているわけではないようである。そこで活用されているのが、アルクからの派遣講師である。

アルク主催のセミナーということで、アルク賞賛の語りも所々にみられたが(コンテンツとしては、他の業者と比較しても一番のクオリティなのは確かなので否定できないが)、全体を通して大変興味深い内容であった。

2. 研修の成果

本学での自分の英語教育において、e-learning をどのように取り入れていくべきかという課題が常に念頭にあったため、他大学の実際の採用例および実際に授業にどのように取り入れているのかを学ぶことができたことは、自分の今後の授業改善に必ずつながると感じている。

現在、私は TOEIC の授業において、教科書付属の e-learning を学生に課し、そのコンプライト率を成績評価に取り入れている。学生のモチベーションを維持するためには、教員による細やかなフィードバックや、成功体験が必要になってくることを今回の研修で学び、その具体的な方法(グループ分けしてゲーム感覚で、お互いにテストし合う等)を知ることができたことは、現在の自分の授業にも適宜取り入れることができるため、この研修での学びは非常に有意義であった。

英語科においては、現在、e ラーニング検討ワーキンググループ主導のもと、来年度以降の新規 e ラーニングシステム採用およびカリキュラムへの e ラーニングの導入に向けた取り組みを行っている最中である。今回のセミナー参加を受けて、他大学の英語教育における e ラーニングシステムの導入の具体例を知ることができたため、今後、本学において e ラーニングと対面授業のブレンデッドラーニングを導入するなどの取り組みを行ったり、英語教育カリキュラムの再検討をする際に大変参考になると考える。

3. 授業への研修成果の反映状況

研修の成果でも述べたとおりではあるが、教員から学生へのフィードバックなど、今すぐ授業に取り入れられる学びが多かった。グループ対抗のテストなどは、今すぐにはいかないし、ピアレビューなども、少人数クラスでしか可能ではないと思うが、できる限り実践していきたいと思う。また、成績評価に組み込むだけでは学生のモチベーションは上がらないので、教員からのアプローチ方法を変えないといけないことを学んだ。授業内でできるだけ、e-learning での学びと、学修成果の確認テストを取り入れていきたい。

また、今回はアルクの e-learning の利用例であり、私の授業では教科書付属の e-learning を採用しているので全てが同じとはいかないが、月 1 回の教員による履修者の e-learning 進捗具合のチェックや、e-learning で学習した範囲の確認テストはすぐ取り入れることが可能である。通常のテキスト使用による授業の支障のない範囲で、試験的にも e-learning の導入が学生の授業外の学習時間の拡充にどのようにつながり、学生の語学力アップ・TOEIC 点数アップにどのようにつながっていくのか、観察を行ってみたい。

学 部 長	学習・教育支援 センター所長	学習・教育支援 センター委員会	名古屋教務課長	係